赤い旗

槇本楠郎

青空文庫

プロレタリアの少年少女へ

貧しい子供たちよ。

おぢさんは、みんなが大へん可愛い。この本は君たちに讀んでもらひ、歌つてもらうために書いたのだ。金持の子供なんか讀まなくたつていい。

おぢさんは君たちのお父さんやお母さんと同じやうに貧乏だ。そして君たちのやうな元氣な可愛い子供を持つてゐる。去年は六つになるスミレといふ女の子を一人亡くした。それはおぢさんが貧乏なために、金持の子のやうに大切にしてやられなかつたからだ。だがおぢさんにはまだ二人の子供がある。もしこの二人が死んでしまつても、おぢさんはまだ〳〵氣を落しはしまい。それは元氣な君たちが大勢ゐてくれるからだ。それほどおぢさんは君たちを、自分の子のやうに思つてゐる。

おぢさんは永いこと、いつも、君たちにいい本をこしらへてあげたいと思つてゐた。けれど貧乏では本も書けない。今度やつとのことで、この本をつくることができた。けれどこれは手はじめで、そんなにいいものとは云へない。第一、本が高すぎる。それに童謠だつて、まだほんとうに君たちに好かれないかも知れない。けれど君たちは金持の子や、金持の味方の詩人やまたそいつらと一しよに貧乏人を馬鹿にしてゐる奴らのやうに、このおぢさんの童謠を一も二もなく、頭からバカにし、惡口なんか云はないだらう。きつと、おぢさんの子供やおぢさんを好いてくれる子供たちと同じやうに、よろこんで讀んでくれ、よろこんで歌つてくれるにちがひない。

そこで、わたしの好きな子供たちよ。おぢさんはみんなとお約束しよう。この次に出すおぢさんの本は、きつといい本で、もつと安くすること、を。

で、今度は君たちから、おぢさんにお約束をしてもらひたい。と云ふのは、おぢさんに前の約束をきつと守らすためには、君たちはこの本をよく讀んで、そしてその中の一番好きな歌とか、嫌ひな歌とか、この歌はこんな時に使つたらどうだつたとか、今度はこんな時に歌ふこんな歌を作つてほしいとか、そう云つたことをドシ〳〵手紙かハガキかで、云つてよこしてもらひたい。また君たちの作つた歌もぜひおくつて見せてほしい。も一つ。この本は自分ひとりでは讀まないで、なるべくお友だちみんなに見せ、讀ませ、貸してやるやうにしてもらひたい。そしてみんな仲よく、元氣に、大勢で歌ふことだ。——これを是非お約束してもらひたい。

ではみんなよ、早く大きくなつて、君たちも勇敢なプロレタリアの闘士となつて、君たちや君たちのお父さんお母さんを苦しめてゐる奴らを叩きのめしてくれ！

吉祥寺四八〇

東京府下

一千九百三十年四月槇本楠郎

梟と燕と鶏

ふくろは老いぼれ
いくぢなし
お山にかくれて
夜は鳴く
『ぼろ着て奉公』
おらイヤだ

つばめはハイカラ
燕尾服
『土喰て虫喰て
口濁い』
もんどり打つては
空でなく

にはとりや朝から
聲高く
まつ紅な鶏冠を
ふり立てて
蹴爪とぎとぎ
『米くれろう！』

飴ちよこブルジヨア
飴屋のぢいさん
プープと吹けば

あれあれふくれる
大蛸入道

いやいや狸に
よく似たおやぢ

こいつ、たしかに
よくないやつだ。

お尻の竹から
プープと吹けば

おやおやふくれる
でツかいお腹

飴ちよこブルジヨア
でツかいお腹

プープと吹く間に

あら、あら、パチン。

馬（うま）

馬（うま）、馬（うま）、荷馬（にうま）
うれしいか
目（め）かくしされて
飾（かざ）られて
エツチラ、オツチラ
車（くるま）ひく

車（くるま）はコロ〳〵
酒樽（さかだる）だ
ヒラ〳〵小旗（こはた）に
かざられて
コロ〳〵車（くるま）は
酒樽（さかだる）だ

エツチラ、オツチラ
町（まち）を行（ゆ）く
初荷（はつに）の車（くるま）の
色旗（いろはた）だ
荷馬（にうま）はビツシヨリ
大汗（おほあせ）だ

鸚鵡

木蔭のとまり木
　鸚鵡さん
今日も朝から
　ガーリガリ
あんよの鎖を
　ガーリガリ
切りたい切りたい
　この鎖

ガチガチかんでも
　まだ切れぬ
いつまでかんでも
　まだ切れぬ
くさりは中まで
　かたい金
それでもかまずにや
　ゐられない

空はひろびろ
　日は眞晝
木蔭のそよ風
　そうよそよ

それでも鸚鵡は
　知らぬ顔
あんよの鎖を
　ガーリガリ

落した笛

とんびトロロの
笛吹きが
笛を落して
さがしてる

どこかそこらに
笛ないか
ピートロトロの
笛ないか

笛はたんぼの
稲の中
案山子の袂で
鳴いてつた

あーれは鈴虫
チンチロリン
それともこほろぎ
きりぎりす

おーとし物だ
おまはりさん

ピートロトロの
笛ないか

おまはりや呼笛の
銀の笛
チヨツキにぶらさげ
怒鳴つた

雀追ひ

痩せた雀が、チーパツパ
稻穗にパタ〳〵おりて來る
お前に食はしてなるものか
　ホーイ・ホーイ、ほら逃げた

逃げてはまた來る、チイパツパ
痩せた雀が手を合はす
ほしけりやお前もお作りよ
　ホーイ・ホーイ、ほら逃げた

逃げてもまた來る、チイパツパ
お腹がチイチとおし拜む
作らんものには見せて置こ
　ホーイ・ホーイ、ほら逃げた

追つても追つても、チイパツパ
お腹がチイチと泣きすがる
泣いてもお前にややられない
　ホーイ・ホーイ、ほら逃げた

村の學校

村の學校の教室を
ちよつと、のぞいて見てごらん
先生と生徒の大喧嘩

耳をひつぱる、ひつぱたく
本をひつ取る、立たしとく
それでもきかなけや、また叩く

となりの教室のぞいたら
うしろに三人立たされて
時間のすむまで泣いてゐた

そのまた、となりの教室は
校長先生の修身で、
『義勇奉公』と教へてた

旗振り爺さん

踏切番の旗ふり爺さん
よろ〳〵出て來てスツクと立つて
今日も朝から旗をふる

旗はなになに赤と白
赤い旗は持つてても
振るのはやつぱり白い旗

ポツポ〳〵と汽車は來る
背中ゆすつてピヨン〳〵跳ねて
急行列車は一二等

踏切番の旗ふり爺さん
行かしたあとでは「こん畜生」と
覺えず振るのが赤い旗

メーデーごつこ

一人(ひとり)來い
二人(ふたり)來い
みんな來(こ)い

長屋(ながや)の子供(こども)は
みんな出(で)ろ

おいらは腹(はら)がへつた
手(て)をつなげ
町(まち)のまん中(なか)
ねり歩(ある)かう

メーデーごつこだ
勢揃(せいぞろ)ひ

恐(おそ)れな
亂(みだ)れな
前進(ぜんしん)だ

チンドン飴屋

チンチンドンドン
チンドンドン
あめ屋が來た來た
ぢいさんだ
一錢もらつて
エツサツサ
エツサツサ

チンチンドンドン
チンドンドン
あめ屋のぢいさん
旗をふる
旗はお添えで
チンドンドン
チンドンドン

葉(は)っぱのお金(かね)

こんこん小山(こやま)の野狐(のぎつね)は
化(ば)けてひよっこり町(まち)に出(で)て
葉(は)っぱのお金(かね)で酒買(さけか)うた
葉(は)っぱのお金(かね)であげ買(か)うた
こいつ、ただでは置(お)けないぞ
因幡(ぬなば)の兎(うさぎ)にしてやろか

石地蔵（いしぢぞう）

野中（のなか）のお堂（だう）のお地蔵（ぢぞう）さん
まさかねんねぢやあるまいに
赤（あか）い着物（きもの）によだれかけ
おまへは中（なか）まで石（いし）のはづ
ふざけちやいけないおよこしよ
おいらは寒（さむ）うて洟（はな）が出（で）る

一寸法師(いっすんぼうし)

足袋(たび)の穴(あな)から
指(ゆび)が出(で)た

一寸法師(いっすんぼうし)の
よごれ顔(かお)

へへのの・もへの・と
書(か)いてやれ

おきあがりこぼし

誰をにらむかおきやがりこぼし
赤い着物をおつ着せられて
お手々あんよもありやしない
ころ〳〵ころんでおきやがりこぼし

手足どうしたおきやがりこぼし
誰に取られたお手々よあんよ
叩き出されちやころ〳〵ころび
からだゆすつてむつくり起きる

手足ないのでおきやがりこぼし
ほうり出されちやむつくり起きて
なんだ奴等とハツタとにらむ
赤い着物のおきやがりこぼし

舌切雀

チイチク、パツパ
チイパツパ

お腹がすいて
糊なめて

舌を切られた
小雀は

口もきかれず
チイパツパ

ひとりでしくしく
チイパツパ

お宿をさがして
チイパツパ

行つても行つても
宿はなく

こんこん小雪が
降つて來た

野中の家にも
灯がついた

猿と蟹

猿から貰つた柿の種
だまされたとは知らぬ蟹
ねぢ鉢巻で肥料やる
二葉に芽が出て花が咲く
果がなりやどこから出て來たか
ひよつくり山猿・赤い顔

見事見事とほめそやし
つる〳〵登つて山猿め
ムシヤ〳〵頬張る赤い柿
氣のよい蟹はだまされて
下から見上げて待つてれば
甲羅にはぢける青い柿

やれ〳〵ひどい山猿め
こいつ逃がしてなるものか
仲間の石臼・蜂に栗
大勢味方が集つて
たうとう山猿・赤い顔
チヨン切り落して蒼い顔

とるとるづくし

とるとるづくしではじめましよ
熊と金太郎・すまうとる
こぶとり爺さん・こぶをとる
猿はだまして柿をとる
にぎりめし・柿のたね
蟹のかたきは、みなでとる
　ええ、みなでとる！

とるとるづくしではじめましよ
地主はいばつて年貢米とる
金持ア遊んでて利子をとる
あつても無くても税はとる
ブルジヨア・にぎり拳
今においらが、あれをとる
　ええ、あれをとる！

なアに？ ――「金持」――

お化さん

ころころ、こいつは
なにものだ

叩けばニヨツキリ
首が出た

ムクムク手が出た
足が出た

でつかいお腹は
ビール樽

こいつ、なに食た
なに甜めた

ブンブク茶釜か
お化さん

うつかり側には
寄りつけぬ

あぶない、あぶない

首ふり人形

突いても引いても
首ふり人形
ちよこんと坐つて
パツチリ見つめ
大きな頭を
コツクリ・コクリ
　首ふり人形はなさけない

どうせおもちやの
首ふり人形
聲も立てずに
コツクリ・コクリ
せめて首でも
左へ右へ
　首ふり人形はなさけない

猫柳（ねこやなぎ）

ねこやなぎ
なんにも食（た）べずに親（おや）も子（こ）も
生木（なまき）をかぢつてねこやなぎ
みんな揃（そろ）つて尻立（しりた）てて
食（く）へても食（く）へでもねこやなぎ
春（はる）の來（く）るのを待（ま）つてゐる

赤い旗

起てよ
起てよ
集まれ、子供
われ等の旗は
われ等で守らう
なびけ
はためけ
×い旗

進め
進め
手を組め、子供
われ等の道は
われ等で開かう
うねれ
波打て
×い旗

野良かへり

出た出た月が森の上
森の上
胡爪のやうに青い月
青い月

蛙は水田でお囃しだ
お囃しだ
カッカッ・クックツ、カックックク
カックック

螢は野道で揚げ花火
揚げ花火
可愛い花火がピーカピカ
ピーカピカ

歸ればお家に灯が一つ
灯が一つ
黄ろいランプに蛾が二つ
蛾が二つ

三つ食べたら止しませう
止しませう

御飯は黒うても温かい
温かい

へちま

のんき坊主のへちまの親子
今日も朝からグウグウグウ

今にもころんで落ちさうな
へちまはだらりと居眠だ

居眠姿の、のんきな親子
頭の先からくさつてしまへ

赤い豆(あかいまめ)

莢豆(さやまめ)
はぢけた

赤い豆(あかいまめ)
こウろころ

いつしよになれ
一つになれ

仲(なか)よし
こよし

もとの莢(さや)を
忘(わす)れな

山羊（やぎ）

あごひげちよつぴり
　お山羊（やぎ）さん
食（た）べても食（た）べても
　やせつぽの
お前（まへ）のお臀（しり）の
　そのお骨（ほね）
一膳飯（ぜんめし）でも
　おごりましよ
それとも焼鳥（やきとり）
　召（め）し上（あが）れ
牛飯（ぎうめし）ならば
　なほよかろ

小石けりけり

小石けりけり
野道を行けば
　カラカラコン・カラカラコン
來た來た犬めが
太つちよの豚と
　カラカラコン・カラカラコン

豚も犬めも
ご自慢のおひげ
　カラカラコン・カラカラコン
おひげの先には
つばきの提灯
　カラカラコン・カラカラコン

ええい、ここらで
小石をチヨンだ
　カラカラコン・カラカラコン
おつと見た見た
ワンワンにブーブ
　カラカラコン・カラカラコン

とんとん・とびつこ

とんとんとびつこ誰さんだ
となりのびつこのとん吉だ
とん吉とんとんなにしてる
とんとんとなりへ飛んでゆく

となりの子供もとん吉だ
草履と足駄のとんからこ
とんとん飛ぶのは廢兵さん
たんぼの案山子もとんからこ

片脚同志が集つて
とんからとんからとびつこだ
とんとんとびつこ轉びやせぬ
みんなで支えて凭れ合ひ
　凭れ合ひ

早鐘

ほら鳴る、鐘だ
早鐘だ
蓑笠姿で飛んで行く
かけ足
はや足
エツサツサ

ほら鳴る、鐘だ
早鐘だ
用意は出来たか、みな出たか
かけ足
はや足
エツサツサ

ほら鳴る、鐘だ
早鐘だ
銅鑼だ、太鼓だ、法螺貝だ
かけ足
はや足
エツサツサ

ほら鳴る、鐘だ

早鐘だ
來た來た向ふの村からも
かけ足
はや足
エツサツサ

ほら鳴る、鐘だ
早鐘だ
亂れな、騒ぐな、あわてるな
かけ足
はや足
エツサツサ

ほら鳴る、鐘だ
早鐘だ
遅れな、分れな、離れるな
かけ足
はや足
エツサツサ

わんわん

犬めは
クンクン
小屋から出てくる

ワンと吠え
ワンと吠え
吠えたら這つて來い

わんわん
ここぢや
お手鳴る方へ——

這つて來い
廻つて來い
三べん廻つておぢぎをせ

わんわん
忘れた
元の道を忘れた

あつち、こつち
うウろ、うろ

片脚あげては小便だ

おんまコツコ

おんまコツコ
ハイドード
おんまはマルクス
エンゲルス
リイプクネヒトも
四つん這ひ
乗りては赤毛の
チビのジヤン

おんまコツコ
ハイドード
それ行けおんま
ハイドード
おやぢのマルクス
エンゲルス
リイプクネヒトも
這ひまはる

おんまこつこ
ハイドード
赤毛のチビは
ぶツたたく

おんまは三匹
大急ぎ
スタコラサツサと
這ひまはる

おら子守

一つ、ひだちの山の中
山の中
食へずに出て來たおら子守

二つ、ふた親見捨てたが
見捨てたが
やつぱりここでも食へはせぬ

三つ、みんなはなぐさめる
なぐさめる
今においらの世が來るぞ

四つ、夜ごとに見る夢は
見る夢は
せなかの赤兒に角が出た

五つ、いやでも泣く時は
泣く時は
ねんねん・ころいち・ねんころりん

六つ、胸には火が燃える
火が燃える
朝から晩まで無理ばかり

七つ、なんでも習ひたい
習ひたい
くにへ手紙も書きたいなあ

八つ、宿無し野良の犬
野良の犬
おまへも寒かろ雪が降る

九つ、ここまで出て見れば
出て見れば
工場の汽笛が、あれ鳴るよ

十で、たうとうおさらばだ
おさらばだ
年期があければ身は自由、身は自由

歯車をどり
揃うた揃うた
　歯並が揃うた
歯車をどりの
　足並揃うた
環になれ擴がれ
　くるくるまはれ
ガラガラ歯車
　歯車をどり
　ガラガラ・ギツチヤン・ガラガラガラ
　ガラガラ・ギツチヤン・ガラガラガラ
朝から晩まで
　工場の隅で
油もきれて
　お腹もすいて
ガチガチ咬み合ふ
　歯と歯のきしみ
おいら歯車
　恨みは深い
　ガラガラ・ギツチヤン・ガラガラガラ
　ガラガラ・ギツチヤン・ガラガラガラ

とつて食べたい
　太つちよのお首
捲いて裂きたい
　なアがい裳裾
それもならずに
　ほこりを浴びて
おいら歯車
　恨みは深い
　ガラガラ・ギツチヤン・ガラガラガラ
　ガラガラ・ギツチヤン・ガラガラガラ
今日も朝から
　なんにも食べず
お腹ペコペコ
　歯をかみ鳴らす
せめてこわれな
　歯並よ歯並
今に明るい
　日の目は見える
　ガラガラ・ギツチヤン・ガラガラガラ
　ガラガラ・ギツチヤン・ガラガラガラ

縄とび唄

一つとんだ
　とんだ
何がとんだ
　　とんだ
村から里へ
×い旗がとんだ

二つとんだ
　とんだ
何がとんだ
　　とんだ
×い旗の上を
てツぽ丸がとんだ

三つとんだ
　とんだ
何がとんだ
　　とんだ
お×の屋根へ
鎌と鎚がとんだ

四つとんだ
　　とんだ
何がとんだ
　　とんだ
まつ紅な火の粉が
天までとんだ

五つとんだ
　とんだ
何がとんだ
　　とんだ
邪魔になるものは
なにもかも、ほらとんだ

手まり唄

一イ、二ウ、三イ、四ウ
耳は塞がれ、お口は縫はれ
手枷、足枷、團子にされて
糸をまかれて、しめくくられて
とんとん、ころりと、お手毬さんだ
つけばつくほど、はづんで上る
はづめ、手まりよ、とんとん踊れ
明日は手まりも××××だ
蒼い顔して顫へるお方
どいた、どいたりお手まりさんだ
邪魔をする子はお×りさんか
それでなければ××さんだ
敵と味方はもうよくわかる
　もうよくわかる
　　――受け渡し

コンコン小雪

坊やよ、坊やよ、よくおきき
父さん小さいその時は
お腹がすいてもお米ない
コンコン小雪の降る晩は
ひとりで田圃の雪見てた
コンコン小雪がお米なら
どんなに氣ままに食べらりように

坊やよ、坊やよ、よくおきき
母さん小さいその時は
寒うても着物はただ一つ
コンコン小雪の降る晩は
ひとりでお屋根の雪見てた
コンコン小雪が綿ならば
どんなにぬくぬく着らりように

青空文庫情報

底本：「赤い旗」名著復刻　日本児童文学館　25、ほるぷ出版
　　1971（昭和46）年5月1日発行
底本の親本：「赤い旗」紅玉堂書店
　　1930（昭和5）年5月5日発行
入力：蒋龍
校正：染川隆俊
2011年1月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い旗

槇本楠郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/